現代アメリカの家族

安 倍 美 帆

現在、アメリカにはさまざまな形の家族が存在している。共働きで子どものいない夫婦、片親家族、同性愛家族、そして再婚家族など実に多様である。かつては、働き手の夫と専業主婦の妻、そして子どもから成る核家族がアメリカの家族の典型であった。それが60年代に入り、伝統からの解放、性の解放が叫ばれ、70年代には、非婚や離婚が自立した女性の象徴となった。親になることよりも、キャリアを積み、自分らしく生きることがトレンドとなり、シングルやDINKS（共働きで子どものいない夫婦）がもてはやされた。しかし、80年代後半から、キャリア一筋ではなく、家族のあり方を見直す風潮が高まってきた。そして、90年代に入り、養子縁組はよりオープンになり、生殖技術が進歩して、老夫婦やゲイのカップルでさえ子どもを持つようになり、家族の形はより多様化、複雑化していった。

このような流れを捉えた上で、80年代後半から90年代、そして現在に至るまでのアメリカの家族を取り上げ、特に離婚とステップファミリーの問題に注目した。

家族の形が多様化する中で、かつて主流であった夫婦と子どもから成る核家族の形も変化してきた。初婚からの夫婦と子ども世帯の割合は低下し、再婚によって生じるステップファミリーが増加してきた。アメリカは他の国に比べても離婚率が高く、初婚のうち半数は離婚してしまう。また、離婚経験者の75％が再婚し、再婚の60％が離婚に終わる。離婚率は60年代から急上昇し、60－80年の20年間で離婚数は2.6倍となっており、世界でも群を抜いている。離婚率増加にはさまざまな要因がある。女性の社会進出、個人主義の思想、新離婚法の成立、さらに宗教の存在が弱くなったこと、離婚が社会的に受け入られ始めたこと、などが考えられる。そして、離婚によってさまざまな問題が引き起こされる。

ステップファミリーとは、再婚によってそれまで赤の他人であった者同士が義理の親子や義理の兄弟の関係を築くということである。それは決して容易なことではない。また、両親のうちどちらが親権を持つかや、養育費の支払い、子どもの精神的ストレスなどあらゆる問題が生じてくる。これらの問題解決のためには、できるだけ「よい」離婚をして、離婚後も親としての協力関係を築くことが大切である。

おそらく今後もアメリカ人たちは理想の家族を求め、試行錯誤を続けるのだろう。それは、家族というものを重要視し、またその大切さを知っているからなのだろう。　　（指導教員　中村　敦志）